

「祈りは呼吸のようなものである」とよく言われます。私たちは呼吸出来なければ何も出来ません。どんなに身体が丈夫でも、筋肉や内臓が強くても呼吸が出来なくなると数分で動きが止まります。最悪の場合、死に至ります。だからといって、呼吸を怠ったら苦しくなって死んでしまうかもしれないので呼吸をしっかりとしようという人はいません。(そうですよね) 筋肉を鍛えたり、おなかをひっこめるために運動しようというのは少々意志力が需要ですが呼吸はそんなことはありません。つまり呼吸という非常に重要な働きを私たちは何も意識しないで毎日、やっているわけです。呼吸は生活のために身に着けるべきものというより、呼吸するということが生きている、生活しているということであるということです。祈りも同じです。今日はしっかりと祈ろうとか、この時間は祈ることになっているというのは祈るということが一つの作業あるいは仕事となっているわけですね。しかし聖書は祈りが生活の一部になるだけでなく、こんどは生活が祈りになっていく、そのことを目指しなさいと教えています。クリスチャンの「祈りの生活」とは、祈りが生活になること、生活が祈りになることです。今日のコロサイ 4:2-4 では「祈りの生活」について教えています。どのようにすれば祈りの生活となってゆくのでしょうか？ そうなるためにここでパウロは、祈りに関して三つのことを強調しています。それは第一に「祈りなさい」、第二に「祈ってあげなさい」、そして第三に「祈ってもらいなさい」です。この三つを順に考えてみましょう。

第一の「祈りなさい」というのは、自分のために祈るということです。自分のために祈ると言っても自分の願いや自分の悩みが解決することを一生懸命祈るということだけではありません。多くの方は、クリスチャンになってはじめて、ほんとうの祈りをするようになったことと思います。それまでは初詣で「家内安全」、「商売繁盛」、「無病息災」などを心に念じたり、神棚や仏壇に手を合わせるようなことがあったとしても、朝に、夕に、また、ことあるごとに神と語り合うような祈りはなかつたろうと思います。つまり誰に祈っているか分かっているということです。クリスチャンになってはじめて、確かな祈りが生活の中に入ってきたのです。信仰生活を続けていくうちに、祈りが生活の一部となり、生活の指針になってきたことでしょう。どんなことをするにも祈りで始め、祈りで終わるようになります。何かを始めるにも終わるにも祈りが無いと何か物足りない感じがするようになってきたらそれは祈ることを身に着けたと言えると思います。

しかし、祈りはたんに時間をかけたり、祈る回数が多ければそれで良いというものではありません。

「たゆみなく祈る」というのは、主体的に祈るということも意味しています。たんに言葉を連ねるだけの祈りではなく、もっと神を知り、神とまじわり、神のみ声を聞く祈りへと成長していくことです。それは、祈りを深めていくとも言えます。また、「たゆみなく祈る」というのは、生涯をかけて祈る、継続して祈るということです。若いうちは、どうしても、活動に心が惹かれ、祈りは後回しになりやすいものです。しかし、若い日のうちに祈ることを学んでいないと、年齢を重ねたからといって、祈りに励むことができるとは限りません。「たゆみなく祈る」というのは、クリスチャンとなった最初から、コツコツと祈りに励み、生涯、祈りを学び続けることを意味しています。祈りが生活の一部になるだけでなく、こんどは生活が祈りになっていきます。そして祈りがキリストを証するものとなってゆくのですね。「祈りはクリスチャンの呼吸である」と言われている通り、祈りがキリストのかたちを表すものとなるのです。

第二は「祈ってあげなさい」です。これは、「とりなし」のことで、誰か他の人のために、その人になりかわって祈ることです。使徒パウロが書いた手紙には「私たちは、あなたがたのことを祈るときにいつも、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています」(コロサイ 1:3)、「こういうわけで、私は主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛とを聞いて、あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あなたがたのことを覚えて祈っています」(エペソ 1:15-16)などと書かれています。パウロは、使徒として、諸教会のために祈っていました。それで、パウロはエペソ 6:18 で「すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい」と教えているのです。使徒たちはみな祈りの人であり、とりなしの人でした。使徒たちの後継者は、「監督」と呼ばれましたが、その人たちもとりなしの人でした。

155年に殉教したポリュカルポスは、使徒ヨハネによってスミルナ教会の監督に任命された人です。地域の役人がポリュカルポスを捕まえるために武装した人々を派遣しました。彼らがポリュカルポスを見つけたのは、ポリュカルポスが祈っているときでした。ポリュカルポスはその時少しもあわてず、自分を捕まえにきた人に、まだ祈りが終わっていないので、もう一時間待ってくれるように頼みました。ポリュカルポスは、普段と同じように、執り成しの祈りをしていたのです。

パウロは、コロサイのクリスチャンに、自分のために祈るように願い、また命じています。コロサイ 4:3に「同時に、私たちのためにも祈ってください。神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように祈ってください。」とあります。ここで「同時に」と訳されていることばは「それと共に」という意味があります。自分のために祈るのと「同時に」、多の人のためにも祈ってあげなさい、自分のために祈る、「それと共に」他の人のことをもとりなし祈りなさいというのです。この言葉は、自分のために祈ることと、他の人のために祈ることは同時になされることだということを教えています。クリスチャンになって祈りはじめた最初のころは、自分のことしか祈れなかったかもしれません。しかし、だんだんと、自分の家族のことからはじめて、教会のため、知人友人のため、世界のためと祈りの輪をひろげていくことができます。

「主の祈り」では、神を「われらの父よ」と呼び、「われらの糧を今日も与えたまえ」、「われらの罪を赦したまえ」、「われらを試みにあわせず、悪より救い出したまえ」と祈ります。決して「私の…」、「私ひとりの…」ではないのです。主の祈りは、自分のために祈ると共に、他の人のために「祈ってあげる」、他の人と連帯して祈ることを教えています。他の人のために祈るとき、これを覚えることは大切です。とくに、私たちが他の人の欠けたところのために祈るとき、主イエスが「私たち」と言って祈れと言われたことを忘れ、「あの人たち」という思いで祈るなら、それは他の人のために祈っているのではなく、他の人を祈りを使って批判していることになるかもしれないからです。「神さま、私の信仰は大丈夫ですが、あの人たちは間違っています。それを正してあげてください」などといった祈りは、あのパリサイ人が、取税人を見て「神さま、私が、あの取税人のようでないことを感謝します」と祈ったのと同じような祈りになってしまいます。「私の」ではなく「私たちの」と祈るように、罪の赦しを願うときも、他の人の罪を自分の罪であるかのようにして、赦しを願い、とりなしていく、そのことを主イエスは教え、身をもって示されたのです。「あの人の」罪ではなく「私たちの」罪として、罪を悲しみ、悔い、赦しを求める、また、あの人の成長ではなく、自らも含めて「私たちの」成長を求めて祈る、それがほんとうのとりなしの祈りです。

第三は、「祈ってもらいなさい」です。

パウロは、コロサイ 4:3,4で「神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように祈ってください。・・私がこの奥義を、語るべき語り方で明らかに示すことができるように、祈ってください。」と言いました。これは、「祈りなさい」という命令でもあり、また「祈ってください」という願いでもあります。伝道のために祈るのはクリスチャンの義務です。ですから、投獄されて伝道できないでいるパウロが自由になり、再び伝道できるように、しかも、パウロが反対者を恐れず、「キリストの奥義」を大胆に、明確に語れるように祈るのは、クリスチャンの、また教会のなすべきことでした。実際、使徒ペテロがユダヤの最高議会に逮捕されたとき、教会は共に集まって彼のために祈り、釈放されたときには「主よ。いま彼らの脅かしをご覧になって、しもべたちにあなたのみことばを大胆に語らせてください」（使徒 4:29）と祈りました。ペテロがヘロデ王によって投獄されたときには、「教会は彼のために、熱心な祈りを神にささげていた。」（使徒 12:5）のでした。

けれどもパウロは、ここで「祈りなさい」と命じるだけでなく「祈ってください」と願っています。さきほど触れたように使徒パウロは、諸教会のためにいつも祈り、文字通りすべての聖徒のために祈ることができた人でした。おそらく、パウロのもとには、「パウロ先生、私のために祈ってください」と言って、パウロに祈ってもらうため、大勢の人が毎日つめかけていたことでしょう。パウロは、強い信仰を持ち、

聖霊に満たされた人でしたから、他の人がパウロの祈りを必要としていても、パウロは他の人から祈ってもらう必要がないと思われていたかもしれません。しかし、祈ってもらわなくて良い人など、この世界に誰ひとりいません。自らが本当に祈る人は、他の人から祈ってもらうことがどんなに必要なことかを知っているのです。ですから例えば牧師伝道師に「私のために祈ってください」とおっしゃるだけでなく、そのつとめを果たすことが出来るように私たちのためにも祈っていただきたいと願います。以前 youtube である大学の応援団の様子があったので見ていました。上級生と下級生の間の信じられないくらいの区別に、「もろパワハラでしょ」と突っ込みたくなるような部活動の様子が映っていました。一体いつの時代の話やねんと思ったりもしました。ただ一点、感心したのは試合に負けたらそれは自分たちの応援が足りないからだというところに常に帰結するんですね。いやいや負けたのはそのチームに力が無かったからだと思うのですが彼らは自分たちの責任だということにいくんですね。牧師自ら言うのも少しためらいますが牧師らの牧会スタッフは精一杯教会の兄弟姉妹達のことを覚えて祈っています。しかしその奉仕が続けて出来るために教会の皆さんに祈っていただきたいと願います。時には教会の兄弟姉妹の要求に応えられない時には私が祈っていないからかもしれないと受け止め、ぜひ我々のために祈っていただきたいと思います。

牧会スタッフだけではありません。私たちは「たゆみなく祈りなさい」と教えられていますが、時として祈れなくなってしまうことがあります。祈っても、祈っても、何の答えもないように思えるとき、「祈っても何も変わらない」とあきらめてしまうことがあります。「たゆみなく祈る」どころか、「祈ったり、祈らなくなったり」の状態に陥ります。それがしばらく続くと「祈ったり、祈らなかつたり」が「祈らなかつたり、祈らなかつたり」ということになるかもしれません。そんなときどうしたら良いのでしょうか。「私のために祈ってください」と言って他の人に祈ってもらえば良いのです。とりなしを願えば良いのです。私たちがどう祈ったらよいかわからないときも、「御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてください」(ローマ 8:26)。聖霊の深いうめきから出たひとつのことばが「私のために祈ってください」なのかもしれません。聖霊が私たちのうちに働き、主イエスが天でとりなし、そして、神がこの世界のすべてのものを働かせ、私たちのために最善をなしてくださるのです。そして、とりなしの力により、自らも祈ることができるようになっていくのです。「祈りなさい。」「祈ってあげなさい。」「祈ってもらいなさい。」この三つのことを、この週も励みましょう。